徒然草を讀む（平成二十六年十月より繼續中）

横濱市ユートピア青葉「文語」（もえぎ野教室）作品

飯田美和子

第十一段、山里に入り、苔むす細道踏み分け、懸樋の雫ならではつゆ訪ふものなき庵に、折り散りたる菊・紅葉などありてと、秋の靜寂にして鄙なる路穩やかに歩みきて、はたとたわわに實りたる柑子の木。きびしく圍ひたるを、固より「圍ひなからましかば」とするは凡庸と覺ゆれど、「この木なからましかば」とする兼好法師の感性、我の及ぶ所に非ず。

飯田隆一

徒然草にて「あらまほし」なる語を學ぶ。この語、かくありたしとの願望を表す。譬ふれば「人は、かたち・ありさまのすぐれたらむこそからまほしかるべけれ」（第一段）、「埋もれぬ名を長き世に殘さんこそあらまほしかるべけれ」（第三十八段）にありなむ。

しかるに異る用ゐ方あり。「家居のつきづきしく（＝似つかはしく）あらまほしきこそ」（第十段）はその家人に取り「似つかはしくありたき家」卽ち、「似つかはしく御誂へ向きの家」と擴張し得べく、かゝるが如く同じ語の意味を廣ぐる作用は今日なほ多く存在するも、文語文にてこれを把握するは難解なり。

埋橋勢津子

移ひやすきもの（第二十六段）「三日見ぬ間の櫻」と言はる。櫻のやうに疾く散るものはなしと數多の人言ひけり。然れども風も吹き敢へず散りゆく心の櫻こそいつそうあはれと思はるれ。

戀しき人の言の葉一つ一つに惑ふこと多し。また愛しき日々の消えゆくこそ儚かるべけれ。

櫻も人の心も移ひやすきものとぞ思ひける。

海野祐子

若き中高生の時分、古文の習ひと言ひしは、文法がことわりに偏りし思ひばかり殘れり。いさゝかも樂しからず。卒業とともにおほかた忘れ果てつ。いと口惜し。

二年ほどもとより、市川先生に導かれ文語のとば口に戻りぬ。思ほえず面白し。

「文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ」（第十三段）の心持ちに、至極なびく。されど私のごとく、當世の双紙のみを語るばかりにて、いにしへの文のことなきはあぢきなし。何時の日か「いにしへのは、あはれなること多かり」（同段）の境地に至らむ。

大野新一

第七段「あだし野の露消ゆる時無く、鳥部山の煙立ち去らでのみ」を弔ひの儀絶えずとて、「住み果つる習ひならばいかにもののあはれもなからん」をかつて怪しげなるまゝ會せしは無常の世を生くるに物のあはれは無しかと。年久しくなりて此度、露消ゆるも、煙立ち去るも人の死を言ふなれば、その否、卽ち人の死することなかりせばの意なりとの教示、疑義氷解、「世は定めなきこそいみじけれ」に感慨す。先達はあらまほしき事、げにとこそ覺えしか。

堂明明美

第百二十八段、雅房大納言が近習の虛言により昇進も給はざりき。生きたる犬の足を斬りつとて、院がこれにより憎ませ給ひける御心は尊きなりと讀み、兼好法師の心を思へり。鳥獸、小さき蟲も愚癡なる故に、身を愛することなほ人よりもまさりて甚し。慈悲の心とは、慈しみ、愛す。雅房大納言は、才賢く、よき人なるに、いづくに慈悲の心失ひけるにや。院の慈悲の御心、されど嚴しさもありなむと思へり。

高橋ちづ子

第六十段、眞乘院の成親僧都の事、をかしく讀みにけり。この僧都何事にも人に優れて人々より一目置かれたる由。されど人を尊重し、思ひ遣る心に缺け、心の趨くままに振舞ふ樣、我にはなほ美しからざる姿に覺ゆ。

學問の道に勵み、年を經て佛の道に努むる人には諫言など申し出づる人はあるまじ。誠に惜しと思へど、かく致らぬ所ありてどうにか帳尻合ひたりと言ふべきか。

中島智子

第五十二段の仁和寺の法師が山上に八幡宮のありけるを知らずして詣らず歸りにけること及び第五十三段のこれも仁和寺の法師が醉ひて興に入る餘り、足鼎なるものを頭に被き、後に拔けず、耳、鼻缺け穿げながらやうやう拔きにけりといふ話を讀みて、高僧なる人の世事に疎きこと慮れども、あまりに粗忽なる行ひは思ひがけなし。

第六十段に成親僧都なるやんごとなき智者の「世を輕く思ひたる曲者にて、萬自由にして、大方人に從ふといふ事なし」とあるものゝ「人に厭はれず、萬許されけり。德の至れりけるにや」とあり、いかにやんごとなき智者の高僧とは言へども、傍若無人の振舞を爲す人を兼好法師が「德の至れりけるにや」と宣ひしは、いさゝかあやしと思へり。

尾形松壽

鎌倉末期　御門の末葉悉く人間の種ならずと（第一段）人ぞ言ふめる。平成の世　現人神を知るやんごとなき翁ぞおはすると仰せける人あり。　（平成二十七年九月四日受附）